

ほあけぼのちいあ の 「つれづれのまま」
たわごと「六道」「地獄・閻魔さん」「不倫」

三題噺を書こうというのではない。

この駄文はある説話の受け売りが主である。

説話とは「昔あるところに・・・があったそうな」という類の史実(文書もんじょとか遺品)にない語り種(かたりぐさ)である。

或る仏説では、人は死後七日間歩き続けてよく聞く例の三途の川に辿り着き六文銭を払える亡者は舟に乗り、払えぬ亡者は歩くか泳いで彼岸へ渡るといふ。別の説では、善人は下流の橋を楽々渡り 悪人は上流の深い激流に投げ込まれ普通の人の中流を舟に乗って行くといふ三つの道(三途)があるともいふ。また別の説では、六道の内餓鬼・修羅・地獄の三つを三途というのもあるようだ。

三途の川を渡ってから七日毎に代わる代わる十王の裁きを受ける。五番目即ち五七 三十五日目に裁きに当る王がご存じの閻魔大王(地蔵菩薩)である。例の閻魔帳に書かれたり浄玻璃の鏡に映し出された生前の諸行 悪行と罪状により地獄の行先が決められるといふ。

あの怖い地獄ゆかりの閻魔大王が地蔵菩薩(お地蔵さん)といふのは何かしっくりしない。

悪行の要因(パーツ)は殺生、盗み、邪淫、飲酒、妄語、邪見、犯持戒人、父母・阿羅漢殺害など。これらの重なり具合で行く地獄の先が決められる。

地獄は八つに分かれていて、ひとつずつ地下を深か〜く深か〜く下がっていく。

罪の軽い順に地下一階から下に向かって階段は無くましてエレベーターもエスカレーターもないところを約1由旬(14Km位)/1階ずつ落ちて行く。罪状は殺生・盗み・邪淫・飲酒・妄語・邪見・犯持戒人・父母阿羅漢殺害など。それぞれ重なる毎に重くなる行先に「等活地獄」「黒縄地獄」「衆合地獄」「叫喚地獄」「大叫喚地獄」「焦熱地獄」「大焦熱地獄」「無間地獄」といふ名がついている。

各地獄には入口の前に待合室みたいな小地獄が沢山あってそこでも責め苦にあう。

一つ下がる毎に約十倍ずつ責め苦が増すとのこと。

地獄の責め具の定番は真っ赤に溶けた鉄・火・水・糞尿・虫鳥獣の口牙爪・槍刀などで、責められ方は焼かれる・煮られる・喰われる・切られる・刺される・刻まれる・打たれるなど種類は十千億ともいふ説がある。オドロオゾマシイ。

一度死んでも風が吹いて再び生き返り何度も何度も責め苦にあう。

責めには獄卒が関わり中には妖怪女もいてハニートラップ(色仕掛け)をしかけるような可笑しいのもある。

邪淫が関わる衆合地獄の刀葉林の責め苦だ。刀のような葉が茂った木の上に美女がいる。罪人は、その女が欲しくて、鋭い葉で全身を切り裂かれながら木を登る。だが、登り終わると女は下にいて「あなたを慕って降りてきたのに、どうしてあなたは私の側にいないの」と。罪人はまた全身を切り裂かれながら木を降りるが女はまた木の上にいる。これが繰り返されるというもの。

邪淫は今風に平たくいえば不倫。

不倫は、伴侶があるのに他の相応しい異性と二人だけで何をすること。

では、その何が不倫になるかここであらためて考えてみることにしよう。

「単なる逢瀬逢引」「お茶や食事」「酒を飲む」「握手」「腕を組んで歩く」「手を繋いで歩く」「ハグする」「チューする」「セクする」

前半は兎も角、後半の幾つかは衆合地獄墮ちの要件かもしれない。会員の中でこの要件に心当たりのある方は、閻魔さまの前での申開き方をよく考えておくか地獄墮ちを覚悟しておいてください。

或る六道説では、人は死後七七 四十九日まで肉体は滅ぶものの魂はいつまでも滅ぶことなく六道の何れかにいつまでも何度も生まれ変わり死に変わるという。(六道輪廻)

六道とは「天道」「人間道」「修羅」「畜生」「餓鬼」「地獄」。

ここで、両説には矛盾が生じている、地獄行が前者では三十五日目、後者では四十九日目と。

地獄絵というのが各地にあって、これの絵解き(解説)を聴いた。

愛知教育大学の高巢純先生。日本で片手くらいしかないという地獄研究家だ。話が上手い講談師か懐かしい紙芝居屋さんみたいな先生。

地獄を研究している変な先生のゼミに集まる学生も他のゼミで別の研究を身につけて合わせ、将来人生に何かに役立てるのであろう。

以来小生も地獄話が好きになった。

好きにはなって面白くもなって興味深くもなったが地獄へ行ってみたいとか覗いてみたいとは思わない。

小生は地獄には行かない。地獄行の要件が備わっていない。

<この回 おしまい>